

ビーだが、服役中にA女と連絡がとれなくなってしまう。服役中の身だが、知恵を働かせ、また友人の協力を得て調べた結果、何と、A女は死んだはずの夫ニックと一緒に生活していることをつきとめる。そして、刑務所の中でリビーは、元弁護士に服役囚から「ダブル・ジョパディー」という制度の意味を聞く。つまり、いったん、夫殺して処罰を受けたリビーは、再度ニックを殺しても、アメリカ合衆国憲法修正第5条により、罪に問われることはないわけだ。

これを知ったリビーは、仮釈放後のニックへの復讐に燃えて、以降、心身の鍛錬に意欲を燃やす。

そして、待ちに待った仮釈放。

保護監察官の厳しい監視の目をくぐって、ニックの所在を調査したリビーは、保護監察官から奪った拳銃を手に入れた。遂にニックと対面する。そして……。

最後にはリビーの拳銃が火をふき無事(?)ニックへの復讐が成立するが、そこに行きつくまでは、ハラハラ・ドキドキのスリルある「追っかっけこ」が展開される。

このハードアクションを見こして、刑務所での服役中に体力を鍛えていたのかと感心させられるほど、美人女優アシュレイ・ジャッドが、スピーディなアクションに挑戦している。これは、同時に公開された「氷の接吻」での、もの静かで、神秘的な悪女役とは大違いだ。

<二重処罰の禁止とは>

冒頭で述べたとおり、この映画はアメリカ合衆国憲法修正第5条「ダブル・ジョパディー」の条項がテーマだから、その意味を理解しなければ、全く何を描いているのかわからず、ただの追跡ごっこ映画になってしまう。

日本でも「39 [刑法第39条]」という森田芳光監督の作品で、「心神喪失者の行為は、罰しない。心神耗弱者の行為は、その刑を減輕する」という刑法第39条の問題点を描いた作品があったが、「ダブル・ジョパディー」を主題にして、こんな風に映画をつくるというアイデアには、ただただ感心してしまう。

幸せな家庭の妻、絶望にうちひしがれて服役する哀れな中年女、そして「ダブル・ジョパディー」を知って復讐に意欲を燃やし身体を鍛える意欲的な女、仮釈放後見事な行動力を示す知的な女、「独身男性オークション」でニックと再会すべく、黒のアルマーニのドレスを格好よく決めて出かける、かつての美人妻、そして最後に、冷酷に発砲する復讐女。こういうさまざまな顔を、美人女優アシュレイ・ジャッドはうまく演じ分けている。

復讐に意欲を燃やす女はそりゃ恐いけど、その底には息子マティと会いたい、そして再び自分の腕で抱きしめたい、と思う母親リビーの気持ちが流れているだけに、意外と冷酷

さは感じさせない。夫のニックが、うまく悪役に徹した役づくりをしている分だけ、リビ
ーびいきになるのも当然か・・・。

ラストまで飽きさせず、スクリーンに集中させてくれる好作品。特に、アシュレイ・ジ
ャッドの好きな人は必見。

2001（平成13）年10月記